

---

# 魔界に行こう！？

たすく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔界に行こう！？

### 【Zマーク】

Z7815Y

### 【作者名】

たすべ

### 【あらすじ】

自サイトより転載。

2000年ぐらいに書いたものらしい…クロス物で、相沢君と香里ちゃんが魔界に行っちゃつお話。

「おはよー、香里」

と、名雪。

「おっす、香里」

と、祐一。

「おはよう。・・・でも以外ね。一人がこんなに早く登校して来るなんて」

ありえないわ、というような表情をした香里。

普段は遅刻か遅刻寸前の二人が普通に歩いて登校して来たのだ。それが普通であるが、この二人にとつては普通に登校する事が普通ではない。

「かなり苦労したぞ」

「みたいね」

「二人とも何気なく酷い事言つてない?」

「いつてないぞ(わ)」

はもる祐一と香里。

「そうなかなあ・・・・・?」

疑問詞の名雪。

「こんな所で喋つてないで行くぞ。せつかく遅刻せずに来たのに遅刻になつてしまつ」

「そうだね」

校門に入ろうとした時、何処からとも無く一人の男が走ってきた。

「おー！ 相沢ー！ 美坂ー！ 水瀬ー！」

「ん？ 北川じゃねーか。で、何かようか？」

「大変だ！ 校庭にブラックホールが発生した！！」

「・・・はあ・・・？」

校庭にやつってきた四人。そこには他の生徒が沢山集まっていた。先生が危険だから離れる様にと叫んでいるが聞いている様子は無い。

「あそこだ」

指差す北川。

「ブラックホールねえ・・・それって宇宙にあるものだろ？」 北川  
寝ぼけたじやねーの？」

「阿呆！ 見てから言え！！」

四人は集まっている生徒の人垣にわけ入っていく。  
そして、中心部で四人が見た物。黒い渦が中心に向かって渦巻いて  
いた。

「むう・・・これは・・・」

「ほら！ 言つた通りだろ？！」

「何これ？」

「宇宙人だよ。宇宙人が攻めてきたよ」

「じつ

鈍い音がする。

「酷いよ」

「寝ぼけないの！」

香里が名雪を殴つたのだ。

「これつて何かしら？ 北川君の言つとおりにブラックホールみたいだけど？」

「地球上に出来るモンなのか？ 香里？」

「出来るわけ無いでしょ！ そもそもブラックホールは、太陽の三  
十倍以上の重さの星が大爆発をおこしたときにできる星なのよ！」

地球が消し飛んでいるわよ！」

「おお～。さすが、香里先生。  
「ちやかさないのー。」

「へいへい」

その時だつた。

その黒い渦が大きくなつたのだ。

もちろん吸引力も上がった。

「え・・・? わやあああああああつーーー!」

「香里が吸い込まれはじめた。」

卷之三

福里の手を繋ぎ、足を引く。

「……あ  
吸引力は強く  
引かれてた

二十一

祐一！

— 美坂！？

一人が手を伸はした。しかしすでに遅かづた。

ああああああああああああ

うわああああああああああああ

二人は飲み込まれてしまつた。

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゆきゆきゆき・・・・・・

「 もう少し寝かしてえ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

色っぽい声を出して悶える祐一。

それに対しても香里・・・・・キレた。

ぶち

ぐわしゃー！

「 いってれぼつ！」

奇怪な叫び声を上げ、苦しみ転がりまわる祐一。

「 寝ぼけないでよー！」

「 おおう、香里か」

殴られた所を撫でながら、祐一は起き上がった。

「 香里か、じゃないでしょー！？」

「 悪い悪い。そういうや、あの黒い渦に吸い込まれて・・・・ビうなつたんだ？」

「 切り替えが早いわね。まわり見ればわかるわよ」

祐一は周りを見回した。

荒れた大地が続いている。こげ茶色をした土。朽ち果てつつある木。砂漠になり始めているようにも見えた。

「ここ何処?」

「私が聞きたいやうじよ」

「どうしよう?」

「私が聞きたいぐらいよ!」

「怒つてばっかりいると可愛い顔が……ひでぶつ!」

香里の左ストレーントが祐一の顔面に炸裂した。

また、奇怪な叫び声を上げ、苦しみ転がりまわる祐一であった。

「そんな事言つている場合じゃないわよ」

「そ・・・そうみたいだな。・・・しかしいてえ・・・」

再び殴られた所を撫でながら、祐一は起き上がった。

「とりあえず歩いてみましょう」

「そうだな、ここにボケツとしても始まらんな」

二人は歩き始めた。

じぱらぐ歩いて。

景色はほとんど変わらなかつた。

「もう・・・同じような所を歩いているよつだぞ」

「そうみたいね」

「このまま歩いても・・・お?」

「どうしたの?」

「人が居る・・・」

「え・・・」

祐一の視線の先を見た。人影が見える。

枯れ木がそう見える訳ではなさそうだ。

「助けを頼んでみよう・・・おー・・・」

「おもてなし」

香里は祐一の口を塞いた。――

香里は人影に違和感を覚えた

頭があり 腹があり 足があり それ以外にもある力 背中から

あれ人?  
翼みたいのが

「かほーつ」 口を封鎖されてしまふた祐一が、香里と書いた。

香里は、忘る

手を離した。

「いきなり何を・・・・・」

「あれ変よ。翼みたいのが・・・」

祐一が人影を見た時。

人影が増えた

「な・・・！」

「え・・・！」

その景が祐一と畠里の戻

その影が祐一と番里の所に下りてきたのだ。た

「珍しい物見つけたつて？」

それなりの地位にいると思われる青年に部下と思われる青年が報

告じていた。

はい。どうやら、人間のようです」

「人間？ また、攻めてきたのか？」

遙かなる過去、人間、天使、悪魔の三つ巴による戦いがあった。王弟であり、将軍でもあった青年が、人間との和解し、王たる人物を復活させ、戦いは終わったのである。

「いえ、迷つて来たみたいです……」

「はあ？」

青年は呆れた声を上げた。

「どうしましたか？ ギルヴァイス様。一応、牢屋にぶち込んでおきましたが……」

ギルヴァイスと呼ばれた青年は、少し考えたあと言った。

「わかった、後で行く」

薄暗い牢屋。

先ほど捕獲されてしまった祐一と香里がぶち込まれていた。牢屋の隙間から、地下水と思われる水滴が滴り落ちるので恐怖を誘う。

「どうなつちゃうんだろう……？ 食われるのか？」

「私はいやよ！」

「俺だつていやさ。でもあいつ等見たか？ どう見ても悪魔だろ？」

「よくわかっているじゃないか」

鉄格子の前から声がした。

そこには兵らしき人物が数人後ろに控えさせた男女が立っていた。

祐一は香里を後ろに庇う。

「警戒されているな。しょうがないか。自己紹介をしよう。俺はギルヴァイス。こっちはヴィディア」「と男は言った。

「宜しくね」

隣の女性が言った。

「んで、君たちは？」

ギルヴァイスは祐一たちに自己紹介を促す。

「相沢祐一だ」

「美坂香里よ」

怒鳴る祐一に対して震え声の香里。

「怒鳴つたり、怯えなくても・・・」

呆れ顔のギルヴァイス。

「それは無理つてもものでしょ？」

「そうかもしかんが・・・」

「私が変わるわね」

ヴィディアは武器を外し、ギルヴァイスに渡すと牢屋に入ってきた。

戦慄する祐一。

「そんなに怖がらなくていいわ。貴方達の疑問に答えてあげる」  
優しい声で言うヴィディア。

「疑問だと・・・？」

強がる祐一だが、心なしか震えている。

「ここは魔界と呼ばれる場所。そして、私達は悪魔」

「ー？」

「でも、安心して。返してあげるから。それに私達は人間を食わないわよ」

「人間傷つけたら、魔王様に怒られちまうからな」

牢屋の外でギルヴァイスがつぶやく。

(（魔王様・・・！？））

二人の頭の中には、テレビや漫画で描かれている魔王の姿が浮かび上がった。

「ギル。勝手に彼らを人間界に戻せないから、魔王様にお伺いをた

てましょう

「そうだな」

( (魔王様・・・・・ ) )

謁見の間に通された・・・いや、連れて来られた祐一と香里。

そこには四人の男女が居た。

少女と見間違えるほどの美少年。

メガネをかけた科学者らしい青年。

巨乳の美女。

そして、威厳こそあるが普通の少年。

「こいつらは一体・・・・?」

亥く祐一に対してもギルヴァイスが言った。

「言葉に気をつけろよ。彼らは魔界四天王フィアーカルテットの皆さんだ」

「魔界四天王!？」

「そういうこつた」

「ギル、この者達かい? 迷つてきた人間といふのは?」

真ん中に座していた少年が言った。

「ああ、レイジ」

(こいつ・・・魔界四天王に対してもタメ口きいてるぞ。まさか、  
「イツが魔王では・・・?」)

魔界四天王と紹介された人物にタメ口で言ったギルヴァイスに疑問を持つ祐一。

「自己紹介が遅れたな。俺はレイジ。魔界四天王フィアーカルテットの一人」

「お、お、俺は、相沢祐一」

「美坂香里です」

ギルヴァイス、祐一、香里、ヴィティアの順に並んでいる。

逃げ場は無い。祐一は覚悟を決めた。

「僕はユニー。レイジと同じ魔界四天王フィアーカルテットの一人」

「私はフォレスター」

「あたしはパージュだ」

次々と名乗る。

（ガキがユニー。男がフォレスター。巨乳がパージュ。）

変な覚え方する祐一。彼ら、彼女に聞こえていたらただでは済まないが。

「ジェネラル。こいつ等どうするつもりだ？ 良い実験材料なのだが……」

フォレスターがメガネを指で上げるとそう言つた。その目は実験動物を見る目だ。

「綺麗な羽持つてないから、殺しちゃうかな」

ユニーが両腕を頭の後ろに回した格好で無邪氣そうに言つた。

（・・・・おいおい。やっぱ、悪魔だー。すごい事を平氣で言つてるや。）

「およし、お前達。この件はジェネラルが決める」と、  
物騒な事を言う一人をパージュが制した。

（パージュって悪魔。姉御肌・・・？）

「そうだな、人間界へ帰そうか」

「ジェネラル。それはジェネラルが決めた事だから反論せんが、記憶はどうする？」

すでにどうでもよくなりつつあるフォレスターが言つ。

「やっぱ、殺しとこりよ」

「ちうらはユニーだ。殺すか殺さないかしか考えてないようだ。

「そのままで大丈夫だと思うが・・・・」

「（）で議論しても答えは出ないようだね。ここは魔王様に決めて  
もううのはどうかい？」

パージュだ。

「そうだな」

「ちええつ」

ふてくされるユニーであった。

「それでは呼んでくるよ」

「いよいよ、魔王の登場だな」

「どうなつちゃうんだろう、私達」

「魔王次第つてところだな」

「・・・・・」

祐一は香里を抱き寄せた。驚く香里。

「なるよにしかならないわ」

「相沢君・・・・」

それを見ていたパージュがクスクス笑っていた。

「魔王城まで来ていちゃくつなんてやるね、アンタ達」

「いやついてないぞ」

「そつかね？ クスクス。まあ、いいさ。魔王様の御登場だ。粗相の無い様にな」

レイジが奥の部屋から戻ってきた。一人の女性を伴つて。

（魔王を連れて来るんじやなかつたのか？）

変な顔をしていた祐一に気がついたギルヴァイスが耳打ちした。

「魔王ジーナローズ様だ」

「なにい！？」

祐一の中で魔王像が崩れた。

目の前にいるのは普通の女性だ。黒い翼を持つてはいるが、綺麗な女性だった。

「声が大きいぞ」

ぎろりと睨むギルヴァイス。

「この者達ですか？ 迷ってきたと言つ人間は？」

「そうです、姉さん」

「姉さん！？」

驚く香里。

ヴィデイアが香里に耳打ちした。

「レイジはね。魔王ジーナローズ様の実弟なよ

「姉弟……」

「ええ……」

詳細をレイジから聞いていたジーナローズ。

「戻しましょう」

「記憶はどうしようか？」

「そのままでかまわないでしょ」「

そういうと、祐一と香里の立っている場所へ歩いてきた。

その後に続く、レイジ。

魔王が田の前にやつってきたので驚く祐一と香里。

「『』めんなさいね。変なことに巻き込んでしまって。時空の歪みが

貴方達をここに運んでしまって」

優しい口調。

「魔王様、お……いや、私達はぜひやつて戻れば宜しいのでしょうか？」

「私の力で帰します」

そう言つとすつと祐一と香里を抱きしめた。

「……」

魔王に抱きしめられるという状況に驚くしかない祐一と香里であった。

魔方陣の中央に立つ祐一と香里。

その周りには、魔王ジーナローズ・レイジ・ギルヴァイス・ヴィデ

イアが居る。

魔界四天王ファイアーカルテットは退室して、各自の居城に戻つていった。

「それでは帰します。あ、あまり緊張しなくてもいいですよ  
魔王というより、優しいお姉さんという感じのジーナローズ。  
祐一と香里の緊張が緩む。

「始めます」

そう言つと呪文を唱え始めた。魔方陣が輝きだした。そして祐一と香里を包んで、その姿が消える直前・・・・・

「さようなら。愛しい人間達・・・・・」

「きやああああああああああああ・・・・・・・・・・・・・・

黒い渦からはじき出されてきた。

「大丈夫か！」

「おお川か 懐かしいなあ・・・」

「名畫。一体何が起きたの?」

「吸い込まれたと思ったらすぐにはじき出されたんだよ」

え・・・すぐ?

「やがた」

香里には魔界へ行つて魔王に会つたと言つのが嘘のよつた気がした。

「香里大丈夫？」

香里には

「香里大丈夫？」  
「大丈夫よ」

香里には気になつていた。魔王が、ジーナローズがいつた言葉。

(さよなら。愛しい人間達・・・・)

おしま  
い

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7815y/>

---

魔界に行こう！？

2011年11月23日11時52分発行